池波正太郎『鬼平犯科帳』における人間観

View of Human Being in Ikenami Shotaro's *Onihei Hankacho*

笠井　哲
福島工業高等専門学校一般教科
Akira Kasai
Fukushima National College of Technology, Department of General Education
(2011年8月29日受理)

Onihei Hankacho which is one of the three major works of Ikenami Shotaro makes Hasegawa Heizo who lived a chief character. Heizo understands the subtleties of the human feeling and is drawn a bad person on the organization as a person receiving inside. In addition, Heizo is done with an owner of the view of human being of "the right and wrong singularity" to "do a good thing while doing that the creature called the human being is bad". The purpose of this paper is to consider the view of human being in *Onihei Hankacho* which Ikenami Shotaro drew through Hasegawa Heizo.
Key words: Ikenami Shotaro, *Onihei Hankacho*, human being, good, bad

1. はじめに

鬼平すなわち「鬼の平蔵」こと、長谷川平蔵宣以は実在の人物であった。しかし、その実像については、詳しいことはわかっていない。

池波正太郎の描く平蔵は、次のようである[1)]。父の宣雄が下女に手をつけて生まれたため、巣鴨の祖父のもとで育てられる。若い頃の名前は鉄三郎、17歳になって入江町の長谷川家に戻るが、継母は何かにつけていじめにかかり勘当同然の扱いを受ける。そういう家庭への反発から、父のいる屋敷にも戻らず、本所を中心に飲む打つ買うの三拍子に明け暮れる放蕩無頼の生活を送った。

その一方で、剣術は本所の「高杉銀平道場」で一刀流を学び、同じ年の剣友・岸井左馬之助とともに目録を授けられた腕前である。父の死後、28歳で四百石の旗本を継ぎ、二の丸・書院番、同御徒頭、御先手弓頭を歴任していた。天明7年9月19日、火付盗賊改方の長官に就任する。42歳の働き盛りで、笑うと穏やかな顔つきの右頬に深い笑窪ができ、小太りであったという。鬼の平蔵を略して、鬼平と呼ばれた。

『唖の十蔵』において、

「今度の御頭はな、お若いころ、本所三ツ目に屋敷があってな、そりゃもう、放蕩三昧で箸にも棒にもかからなんだお人らしい」

という者もあれば、

「遊ぶことも遊んだが、本所深川へかけての無頼の者どものが、鬼だとか、本所の鉄だとかいって、大いに恐れていたほど顔が売れていたそうな」

などと洩らす老与力もいた[2)]。

町奉行所は、都庁と警視庁を兼ねたような組織である。その中で「火付盗賊改方」は、一種の「特別機動警察隊」のようなものであったといえる。刑事事件についてはかなりの権限を与えられており、悪人たちに対して刀の威力を見せつけることも多かった。これは、江戸時代も中期になると、それだけ火付けや強盗が増えていたことを物語っている。

池波正太郎が考える「盗み」という「悪」の行為は、美学に裏打ちされていなくてはならなかった。「浅草・御厩河岸」には、次のように述べられている。

盗みといっても、衝動にまかせての乱暴な押し込み強盗ではない。
真の盗賊のモラルは、
一、盗まれて難儀するものへは手を出さぬこと。
一、つとめをするとき、人を殺傷せぬこと。
一、女を手ごめにせぬこと。
の三ヵ条が金科玉条というもので、これから外れた、どこにでもころがっているような泥棒を真の盗賊たちは「あさましい」と見るのである[3)]。

盗賊に対し、「モラル」という言葉を持ち出してくるところが、池波正太郎の特徴である。悪の所業であ

る「盗み」を「つとめ」と言い切るのは、人間の不可解さが念頭にあるからに他ならない。『土蜘蛛の金五郎』において、

「むかし、あの金五郎めと同じような奴を見たことがある。こやつも盗賊であったが……盗賊にもよるが…（中略）。悪事によって得た金で善事をおこなう。それで、いささか、胸の中がなぐさめられる。申せば悪党の虚栄なのだ。」[4)]

と記されている。慈善事業のような飯屋を経営している金五郎を、盗賊と見抜いた平蔵の「勘ばたらき」は、善と悪の濃淡を見極める洞察力の賜物であろう。だからといって平蔵は、悪党が善をおこなうことを否定するわけではない。「雲竜剣」において、

「金と申すものは、おもしろいものよ。つぎからつぎと、さまざまな人びとの手にわたりながら善悪二様のはたらきをする」[5)]

と述べられている。こうした人間観は、現代でも十分共感できるものである。

「密通」において、

「人という生きものは、ふしぎなものよ」[6)]

といい、また「むかしなじみ」において、

「人のこころの奥底には、おのれでもわからぬ魔物が棲んでいるのだ、ということだ。」[7)]

という。どのような人間にも、他人には窺い知ることができない表と裏があるということである。「谷中・いろは茶屋」において、

「人間というやつ、遊びながらはたらく生きものさ。善事をおこないつつ、知らぬうちに悪事をやってのける。悪事をはたらきつつ、知らず識らず善事をたのしむ。これが人間だわさ」[8)]

と述べられている。これは、24歳の同心・木村忠悟がとんだ行き違いで思わぬ手柄を立てた後に、すべてを承知して語りかけた平蔵の台詞である。十代から、分不相応な金を手にし様々な経験を積んだ池波の姿が、平蔵に投影されているのはいうまでもない。平蔵には、

こうした人間観があるからこそ、盗賊を密偵に変え、手足のごとく使いこなすこともできるのである[9)]。

といえる。「殺しの波紋」においても、

「人というものは、はじめから悪の道を知っているわけではない。何かの拍子で、小さな悪事を起こしてしまい、それを世間の目にふれさせぬため、また、つぎの悪事をする。そして、これを隠そうとして、さらに大きな悪の道へ踏み込んで行くものなのだ」[10)]

これは、ふとしたことから抜き差しならない悪行を重ねた部下の与力を、自分の手で成敗したところを見ていた密偵・馬伏の茂兵衛に、平蔵が語りかけた言葉である。茂兵衛は、何度も何度もうなずきながら涙ぐむのであった。

ここで、長谷川伸の勉強会に触れておきたい。池波正太郎は、師・長谷川伸の言葉を、自分の大学ノートに「二十六日会聞書」として記している。

昭和30年（1955）１月15日の例会に、次のような師の言葉が残っていた。

「人間というものは、ふだん悪い奴でもセッパ迫ると善いことをする。またふだん善い奴でもセッパ迫ると悪いことをする。そして、ふだんはいいことも悪いこともしている」（人間というものは、もって生まれた本能や欲望の動きを制し切れない弱いところがあるものだ）[11)]

上の括弧内の文章は、池波正太郎のメモであり、池波の修行時代の一端が窺われる。本稿の目的は、池波正太郎が長谷川平蔵を通し描いた『鬼平犯科帳』における人間観について考察することである[12)]。

2. 平蔵の仕事ぶり

「あばたの新助」に、次のように記されている。

部下の与力・同心たちはおろか、密偵に対しても平蔵は全幅の信頼を寄せているのである。この「信頼の目」が曇ったときこそ、
（おれは御役目を辞さねばならぬ）
おもいきわめている平蔵であった。
彼らを信ずることができなくて、〔火盗改メ〕がどうしてつとまろうか[13)]。

平蔵が仲人まで務めた同心の一人が、女にたらしこまれ、内部情報を盗賊側に洩らし、加えて盗みの「見張り」までしていたのだ。その同心は捕り物のさなか、命を落とすのだが、「密告者」であることを平蔵は誰にも洩らさず、大物を狙って「探り」を入れていたのであろう、と説明した。

平蔵が、いささか荒っぽく剣の力を表に出して活躍するにつれ、妬みの声も聞かれるようになった。昔は悪事を働いていた者が自ら賊を斬ってすてるのは、果たしてお上のすることか、というのである。これに対して「蛇の眼」において、平蔵は次のように語る。

「おれの仕様がいかぬとあれば、どうなとしたらよい。お上が、おれのすることを失敗と断じて腹を切れというなら、いつでも切ろう。世の中の仕組が、おれに荒っぽい仕業をさせぬようになれば、いつでも引き下がろう。だが、いまのところ、一の悪のために十の善が滅びることは見のがせぬ。

むかしのおれがことをいいたてるというのか……
あは、はは……ばかも休み休みいえ、悪を知らぬものが悪を取りしまれるか」[14]

人間そのものと、その人間が集まって作っている社会の仕組は、すべてが不条理の反復と交錯とによって成り立っていることを、平蔵は確固と理解していたし、自分の信念を曲げることはなかった。

「殿さま栄五郎」には、次のように記されている。

平蔵は、老中・松平定信へ、人足寄場設置の建言を何度もおこなったが、幕閣ははじめ、
「そのような小細工をしても、みちあふれている浮浪の徒を収容しきれるものではない」
として、平蔵の建言をしりぞけたものであった。
「何ということやら……」
平蔵は苦笑して、
「浮浪の徒と口をきいたこともなく、酒をのみ合うたこともない上ツ方に何がわかろうものか。何事も小から大へひろがる。小を見捨てて大が成ろうか」[15]

平蔵は、前例主義と闘った。彼は、江戸へ集まる無宿の者を一ヵ所に収容した上、手に職をつけさせ、盗賊に転落するのを防ごうとした。つまり、ホームレスの社会復帰と、犯罪の予防を狙った。まずは、画期的な政策提言といえる。しかし、画期的であるほど抵抗が強い。幕閣の反対理由は、「小細工」であるからという。新しいことをしたくないのは、昔も今も同じである。前例主義は、手強い。前例を踏襲していけば、その場は繕うことができる。しかし、実際は問題を先送りしているだけで、いずれツケがまわってくる。

平蔵の粘り強い提言の結果、ついに老中・松平定信が断を下して、石川島６千坪の土地に人足寄場ができた。こうして長谷川平蔵の「智」は、社会政策上および治安対策上の面で、大きく花開いたのである。

3. 人物の見極め

ところで、前述の盗賊三ヶ条をもう一度見てみよう。

一、盗まれて難儀するものへは手を出さぬこと。
一、つとめをするとき、人を殺傷せぬこと。
一、女を手ごめにせぬこと。

よく考えると、この盗賊三ヵ条は、不思議なものである。鬼平をヒーローに仕立て上げるには、悪逆非道の盗賊を多数登場させ、退治する方が読者にとって胸がすくというものであろう。しかし、池波はそうはしない。人の世というものが、そう単純にはいかないと看破している池波にとって、善悪截然と分かれる構図はとれないものであり、代わりに出てきたのがこの三ヵ条なのである。

これは、盗賊の中にも善悪二様があることを示唆している。この存在によって話は、鬼平対盗賊、という単一パタンのみならず、盗賊内部の争い、善から悪へ、悪から善への転化という構図も可能になる。

同心の中にも、悪事を働く輩がいる。よほど慎重に人を選ばないと、火盗改めの方が痛い目にあいかねない。人物の見極めが最大のポイントである。平蔵は、どういう人物を密偵の適任者と考えたのか。

「急ぎばたらき」や殺しを常とする者は、初めから相手にしない。殺傷を常とするような盗賊は、火盗改め得意の果断な処置で、逮捕即処刑がほとんどであるから、密偵になどならない。組織内でも同然、仕事仲間に評判悪い人物は、味方にしてもあまり役に立たない。そこで、平蔵が目につけたのは、先の三ヵ条を守るいわば盗賊の中の良識派である。

例えば大滝の五郎蔵である。彼は密偵の中で唯一、盗賊の頭だった男である。その人柄は盗賊仲間でも有名で、五郎蔵はどんな盗賊かと聞かれた小房の粂八が、「そりゃもう、何から何まで、立派なもので」といって思わず口を押さえてしまうほどであった。

盗賊三ヵ条を守ることに、一体如何なる意味があるのだろうか。平蔵は、そこに約束や信義を守る力があるかどうか判断する基準を、置いたのではないだろうか。密偵となるのは、仲間を裏切る行為である。大義名分が必要である。そして、それ以上に大義名分を貫き通す強い意志が必要である。

約束や信義を簡単に破るような人物では、密偵にしたとしても、いつまた盗賊に戻るかもしれない。密偵として安心して使うには、信義に篤い人物だ、との見極めが必要である。そのためには、盗賊仲間での約束をきちんと守っているかどうかが、重要な判断の根拠になる。

小房の粂八を、見てみよう。尊敬する血頭の丹兵衛が「畜生ばたらき」をしている、という噂を聞いた粂八は「血頭の丹兵衛がそんなことをやるはずがない」と主張し、にせものだと訴える。そしてにせの血頭の丹兵衛の化けの皮をはいでやりたい、という。そこで平蔵は小房の粂八の心意気を確かめる。

「お前が盗賊改方の密偵となることは、盗賊仲間から見れば汚らわしい狗となることだぞ」
「ですが、わっしには恩義のある血頭の大きな名をかたる野郎をそのままにしてはおけねえ。これも仲間内の掟でございますよ」[16]

ここに見られるのは、小房の粂八の信義を守ることに対する堅い決意に他ならない。これこそ平蔵が、密

偵に第一に求めているものであろう。

「討ち入り市兵衛」に、次のような場面がある。

「鞘師・長三郎。面をあげよ」

「は、はい……」

「その五十両で、市兵衛ほか、斬死をした者たちの墓を建ててやるがよい」

「……？」

平蔵にいわれて、何ともいえぬ顔つきになった長三郎と万七へ、

「死んだお頭がことを、忘れるなよ」

にっこりと笑った長谷川平蔵が居間へ入って行った。

居間の障子が閉まった[17]。

役宅の奥庭には、同心・沢田小平次と小柳安五郎、それに神田の鍋町の鞘師・長三郎と万七が控えていた。大盗・蓮沼の市兵衛が、手の者をだまし討ちにした壁川一味の盗人宿に報復戦をしかけたとき、長谷川平蔵は身分を浪人と偽り、五十両をもらって市兵衛を助けた。七十九歳のこの老盗が、盗の掟の三か条を守っているのに共感したからである。

目ざす相手は刺したものの、市兵衛ほか数名が死に、長三郎と万七は火盗改め方に捕らわれた。平蔵は、市兵衛から受け取った、助っ人料の五十両入りの袱紗包みを、沢田同心の手で長三郎の前に置かせた。市兵衛から受けた恩と教えられた作法を忘れるなよ、と言外に匂わせたのである。

4. 善悪不二の人間観

人の心の深みには、神もいれば魔物もいる。阿弥陀仏がいれば、阿修羅もいる。また、腹の底には怨念や冷酷や執着が横たわっているかと思えば、その上を優しい天使たちが飛び交っている。

このように考えると、人間が人間によって、完全に「理解」されるなどということは、ありえないという結論に達する。例えば、『鬼平犯科帳』の全編を通じ響き渡っている「悪」という主調音に、耳をそばだててみるとよい。単に悪といって片付けられないその他の音が、主調音にこびりついているではないだろうか。

現象面の悪だけではなく、内面の悪の存在を考えるとき、誕生から臨終まで徹頭徹尾あまねく善人をつらぬき通した人間など、おそらく誰一人としていないであろう。そう考えると、完全無欠な人間など、この世には一人としていない、という確信に至らざるをえない。

池波正太郎はここに気づいたからこそ、人間という存在の定義に対して謙虚になり、俗と脱俗の境界に深く足を踏み入れ、悪と秘密の世界を執拗に描いたのである。こういった描写に出会うとき、池波の人間を見る眼の奥行きの深さを感じないではいられない。

『鬼平犯科帳』という作品の一番の魅力は、従来の勧善懲悪の物語から脱したことにある。ここにこそ、時代小説の領域と手法を先駆的に開拓した作者の大きな手柄があるのだが、同時にまたこのことは池波正太郎という小説家の人間観を浮き彫りにすることにもなった。それは、主人公・長谷川平蔵の次の言葉に色濃く表れている。「明神の次郎吉」に、

「人間とは、妙な生きものよ」

「悪いことをしながら善いことをし、善いことをしながら悪事をはたらく。こころをゆるし合う友をだまして、そのこころを傷つけまいとする。ふ、ふふ……これ久栄。これでおれも蔭へまわっては、何をしているか知れたものではないぞ」[18]

これが池波正太郎の人間観であり、『鬼平犯科帳』の真骨頂であるといえる。さらにいえば、『鬼平犯科帳』が多くの読者に圧倒的共感をもって受け入れられた理由でもある。幼稚な勧善懲悪では壮烈と反骨は描き出せても、心事や憂苦は描写しきれないことをいち早く見抜いたことはけだし慧眼であった。

さらに池波は、鬼平と同じことを盗賊にも語らせることによって、旧来の勧善懲悪の図式からさらに遠く離れていく。「谷中・いろは茶屋」を引用してみる。

「川越の旦那が、こんなことをいってましたっけ」

「どんな?」

「人間というものはねえ……あれ、くすぐったい、いやですよ、そんな忠さん……」

「人間というものは？」

「人間という生きものは、悪いことをしながら善いこともするし、人にきらわれることをしながら、いつもいつも人に好かれたいとおもっている……」

「そういったのか、川越の旦那が……」[19]

「川越の旦那」というのは盗賊・墓火の秀五郎であるが、盗賊に火付盗賊改方の長官と同じ文句を吐かせることにより、「善」と「悪」と突き合わせ、「清」と「濁」とを作品に溶かし込んだ。ここに至り『鬼平犯科帳』は、勧善懲悪とは完全に決別したのである。

人間のもつ欲望や愚かさを、小賢しく否定するのではなく、まずはそれらの言い分を聞いてみてはどうか。目を凝らして見れば、大きな「悪」の中に小さな「善」が、曇りのない「清」の中にわずかな「濁」が見えてくるはずである。そもそも完全無欠な人間など、この世にいるわけがないではないか。だとしたら、相変わ

らずの勧善懲悪こそ、世間とそこに暮らす人間の「生」を描いていないのではないか。池波正太郎はそう考えて、それに挑戦したと思われる。彼の人間観は、「善悪不二」と呼べるものであった。」

5. 「無記」により眺める

勧善懲悪という単純な腑分けを嫌った池波が、次に目ざしたのはどこであったか。

最初に述べたように、長谷川平蔵は、義母に妾腹の子としていじめぬかれたため屋敷には寄り付かず、本所深川を根城として遊侠無頼の徒に交じり、盗みの片棒を担いだこともあった。「寒月・六間堀」に、

> つまり、それだけ多彩の人生を経験してきたからであろうが、いまになってみると平蔵、つくづくこうおもうのである。
>
> つまりは、人間というもの、生きて行くにもっとも大事のことは……たとえば、今朝の飯のうまさはどうだったとか、今日はひとつ、なんとか暇を見つけて、半刻か一刻を、ぶらりとおのれの好きな場所へ出かけ、好きな食物でも食べ、ぼんやりと酒など酌みながら……さて、今日の夕餉には何を食おうかなどと、そのようなことを考え、夜は一合の寝酒をのんびりとのみ、疲れた身を床に伸ばして、無心にねむりこける。このことに尽きるな）[20]

池波は、悪には容赦しないが情には厚いという鬼平の顔は明確に打ち出しつつも、決してその人物像を類型化させることはなかった。あえて鬼平の人物形容をすれば、『用心棒』に次のように記されている。

> なんともいえぬお人だ。怖くて、やさしくて、おもいやりがあって、あたたかくてやはり、怖いお人だよ[21]

信賞必罰はきちんとやるが、情愛と思いやりを忘れなかった平蔵をうまく形容しているといえよう。

類型化を避けるために作者がしたのは、生活の細々としたことを存分に描き、その細部を人物造形と結びつけることであった。

物語の主人公が、それも火付盗賊改方の長官が、勇猛果敢をもってその名を知られる英雄が、たいへんな寒がりでよく風邪をひき、そのうえに寝坊するなどと、それまでの時代小説家で誰が思いついたであろう。

里中哲彦は鬼平に対し、「無記」という概念を持ち出す。これは、ものごとに「善悪」のレッテルを貼らず、存在と本質を眺めることであるとし、次のようにいっている。

> 善と悪、そして無記を加えてこれを仏教では「三性の原理」というのだが、平蔵はつねにこの「無記」の心境に照らしてものごとを眺めていたように思われる[22]。

たとえば、「兇剣」に次のように記されている。

> 平蔵は曲折に富んだ四十余年の人生経験によって、思索から行動をよぶことよりも、先ず、些細な動作をおこし、そのことによってわが精神を操作することを体得していた。
>
> 絶望や悲嘆に直面したときは、それにふさわしい情緒へ落ちこまず、笑いたくなくとも、先ず笑ってみるのがよいのだ。
>
> すると、その笑ったという行為が、ふしぎに人間のこころへ反応してくる[23]。

これこそが「無記」による自分自身の誘導である。そして、こういう人間だからこそ、平蔵はものごとを大観し細見することができたのである。平蔵が人間や事象を広く深く見ることができたのは、何かに熱中している自分を、離れた場所から冷たい頭で眺めることができたことによる。平蔵が多くの場合、柔軟さと自在さを手に入れることができたのはこのためである。

6. おわりに

『鬼平犯科帳』が多くの現代人を引き付けている要素の一つに、鬼平の人情味あふれる人間関係の処し方がある。この点について西尾忠久は、

> 『鬼平犯科帳』は、煎じつめると、人情劇・世話物といえます[24]。

といっている。「血頭の丹兵衛」において、次のように述べられている。

> 現代は人情蔑視の時代であるから、人間という生きものは情智ともにそなわってこそ〔人〕となるべきことを忘れかけている。情の裏うちなくしては智性おのずから鈍磨することに気づかなくなってきつつあるが、約二百年前のそのころは、この一事、あらためて筆舌にのぼらせるまでもなく、上流下流それぞれの生活環境において生き生きと、しかもさりげなく実践されていたものなのである[25]。

平蔵の情は、密偵となった盗賊たちへの誠意として現われている。誠意を見せることはできそうでなかなかできない、しかし、最も大切なことである。「自分は長官だからお前らごときにいちいち気を配ってなぞいられるか」といった態度を少しでも見せれば、たとえこちらが、生殺与奪権を持っている相手であろうと本気で動いてはくれない。こちらが誠意を見せて、人柄を信じさせてこそ、人は動く。

平蔵の人柄に惹かれ、密偵になったものは多い。その人柄を見て、「たちまちに心服してしまった」蛸坊主の五郎がいる。平蔵が、盗賊夫婦の間に生まれ孤児となったお順を養女としたことを知り、感動した小房の粂八は自身も両親の顔を知らずに育った。誰も人並みに扱わない夜鷹のおもんへの扱いを見て、感服した鷲原の九平がいる。そして人柄に、すっかり魅了され、すべてを白状に及んだのは、大滝の五郎蔵である。伊三次も、鬼平の人柄に感服しきって決意を固めた。

さらに入江町の銕さんのためなら、と密偵になった彦十とおまさがいる。いずれも、平蔵の人柄なくして密偵にはならなかった面々である。かつての仲間にわかれば間違いなく命を奪われる仕事につかせるには、小房の粂八に「私はもう、むかしの仲間にいつ殺られてもいい覚悟ができておりますよ」と言い切らせるだけの人間的な魅力が、平蔵になければならない。

人柄を信じさせるには、相手を本心から信じさせる必要がある。相手も海千山千の盗賊である。嘘は簡単に見抜く。だから平蔵は、本心から相手を信じた。

「深川・千鳥橋」では、密偵になりたての大滝の五郎蔵に不安を抱く部下が、五郎蔵には捕まえないと約束した盗賊を、捕まえてしまったら、と進言したのに対して平蔵はいう。

> 「大和屋金兵衛は手にかけぬと約定したおれの一言。これはな、酒井、男の約束というものだ。相手が将軍家であろうとも、もと盗賊であろうともおれにとっては変わらぬことよ」[23]

小房の粂八を血頭の丹兵衛逮捕に派遣したときも、同行の同心・酒井裕助に「粂八の思うままにさせろ。いささかも彼を疑ってはならぬ」ときつく戒めている。

「浮世の顔」という一遍の最後にも、長谷川平蔵＝池波正太郎の考え方が滲み出ている。平蔵と剣友・岸井左馬之助の会話を聴いてみよう。

> 「人が何か仕出かすことは、必ず、何らかの結果をまねくことなのだ。当たり前のことだがね。」
> 「ははあ……」
> 「その当たり前のことを、人という生きものは、なかなかに、のみこめぬものなのさ、このおれもそうだが……」
> いいさして平蔵は、さも、うまそうに煙草のけむりを吐き出し、
> 「のみこめていりゃあ、人の世の苦労もねえわけだが……」
> わざと伝法な口調で、こう、つけ足した。
> 「そのかわり、つまらねえ世の中になってしまうだろうよ」[26]

以上のように、人間はなかなか理解し難いものであるといえる。ただし、池波正太郎が長谷川平蔵を通し描いた『鬼平犯科帳』における人間観は、「善悪不二」というものであり、それを支えていたのは「無記」の概念なのであった。

文　献

1）長谷川平蔵の実像については、重松一義：鬼平・長谷川平蔵の生涯（新人物往来社，1999）を参照されたい。
2）『鬼平犯科長』からの引用は、講談社の1998年発行の『完本池波正太郎大成』第四巻から第七巻を使用し、漢数字で巻数をアラビア数字で頁数を示すことにする。四・20
3）四・71
4）五・581
5）六・288
6）四・475
7）五・
8）四・186
9）大槻厳：敵を味方にするには，文藝春秋編：「鬼平犯科帳」お愉しみ読本，p. 215（文春文庫，1995）
10）六・54
11）『完本池波正太郎大成』別巻，p. 383
12）拙論：池波正太郎の人間観―梅安から鬼平まで―，研究紀要第37号（福島高専，1998）所収、pp. 74-81を参照されたい。この論文では、鬼平について充分に論じることができなかったので、本稿で改めて取り上げることにした。
13）四・505
14）四・152-153
15）六・182
16）七・355
17）五・202
18）四・178
19）五・108
20）五・163
21）里中哲彦：「鬼平犯科帳」の真髄，p. 36（現代書館，1998）
22）四・379
23）西尾忠久：鬼平犯科帳を助太刀いたす，p. 189（KKベストセラーズ，1996）
24）四・55
25）四・572
26）六・219-220